

# 立教小学校の創設過程

舟橋正真

## はじめに

敗戦後の立教学院は、戦時中に断念した「基督教主義ニヨル教育」を復活し、以後、再建への道を歩みだした。そのなかで、一九四六年の末頃から「学園拡張案」と呼ばれる再建プランが議論され始め<sup>(1)</sup>、それと並行して、四七年四月から実施される新学制への移行も急務となった。

戦後の教育改革により、それまでの学校体系は六・三・三・四の編成に改められ、同年に新製の小学校（六年制）と中学校（三年制）、四八年に高等学校（三年制）、四九年に大学（四年制）が順に発足することになった<sup>(2)</sup>。

立教学院では、一九四七年に新制立教中学校を開設し、翌四八年に旧制立教中学校を分離（一九四九年三月

廃止）して立教高等学校を新設した。同年立教小学校を創設し、四九年には、新制立教大学が発足した<sup>(3)</sup>。こうしてキリスト教主義に基づく立教の「一貫教育」体制が完成したわけだが、このなかでもとくに小学校の創設は、立教学院の再建の基礎をなすものとして位置づけられた。

小学校創設の理念は、すでに学院の沿革史で言及されるところであるが、「六三制が布かれた時、立教に新たに小学校を設立し、全学制課程を一貫して、キリスト教教育が行なわれることは当然の道と考えられた」<sup>(4)</sup>。そこには、「戦前の教育の反省を踏まえ、真のキリスト者を育成するためには、幼時期からキリスト教教育をしなければならぬ」という使命が課されていた<sup>(5)</sup>といわれる。学院は学制改革への対応のなかで小学校構想を推進し、小・中・高・大の「一貫教育」を発足させることに

より、GHQから命じられた学院の再建を果たそうと考  
えたといえる。すなわち小学校の創設は、学院全体の新  
学制への移行と連動した問題であったのではないだろう  
か。

以上から本稿は、立教小学校の創設過程を学制改革の  
視角から分析し、立教学院の「一貫教育」発足の検証を  
試みるものである。

先行研究では、『立教学院百年史』が小学校の創設を  
通史的に叙述しているが、学院内での意思決定を概説す  
る程度で、学制改革への対応という視点からの検証は必  
ずしも十分とはいえない<sup>6)</sup>。筆者は別稿で、立教学院の  
新学制への移行を検証し、そのなかで小学校の創設を  
扱ったが<sup>7)</sup>、開校までの過程の全容を明らかにできたわ  
けではない。

立教小学校研究の基礎資料としては、第三代校長（当  
時、主事）の有賀千代吉が編集した『立教小学校十年  
史』<sup>8)</sup>（以下、『十年史』と略す）が挙げられる。『十年  
史』には、小学校開校の経緯やその後の動向が詳細に叙  
述されている。加えて有賀編著の「主事日記」<sup>9)</sup>も収録  
されており、同書は、小学校創設の検証に欠かすことの  
できない資料といえる。

だが実のところ、それだけでは小学校創設をめぐる立  
教学院内の動向に迫ることは難しく、その実相を解明す

ることはできない。敗戦後の立教再建と学制改革の流れ  
のなかで、小学校構想が学院内でどのように浮上し、推  
進されていったのか、その過程を丹念に検討すること  
が、本稿の分析視角には必要不可欠である。つまりこの  
検証では、立教小学校史の議論にとどまることなく、立  
教学院史のなかに小学校の創設過程を位置づけ、捉え直  
していく必要があるのである。

そこで本稿では、『十年史』に加え、『立教学院八十五  
年史』<sup>10)</sup>や『立教学院百二十五年史 資料編』に収録さ  
れた諸資料、「立教中学校教務日誌」（立教池袋中学校・  
高等学校史料室所蔵）<sup>11)</sup>、そして立教関係者（学院、大  
学、小学校）の回想、未公開の聞き取り資料など、現在  
利用可能なあらゆる史資料を駆使し、立教小学校創設過  
程の内実を実証的に明らかにしていきたい。

## 一 戦前の小学校設立構想

### （1）立教首脳の構想

立教の歴史は、一八七四年にアメリカ聖公会の宣教師  
チャニング・ムーア・ウィリアムズが立教学校を創立し  
たことに始まる。一八八〇年代の欧化主義から国粹主義  
への流れのなかで、立教学校は改組の過程を辿るが、  
一八九六年からは立教尋常中学校と立教専修学校に分か

れ、翌年に東京英語専修学校を開設した。この両専修学校は、立教尋常中学校の上級課程として位置づくものである。一八九八年には中学校令による立教尋常中学校が正式に認可されたが（翌年立教中学校に改称）、その後、中学校以外の各専修学校が閉校になると、中学校卒業生を進学させるための立教独自の高等教育機関の設立が志向された。そして一九〇七年に専門学校令による立教大学を設立、一八年には池袋に大学を移転し二二年に大学令に基づく大学に昇格することになった<sup>(12)</sup>。

当時の立教は、大学と中学校の二校で構成されたが、一九二〇年代を通して小学校の開設を志向する向きがあった。その一人が、立教大学校友会会長の杉浦貞二郎であった。杉浦は立教学校出身であり、一九二三年から立教大学学長事務取扱、三一年に学長となる人物であった。杉浦は、「大学はあつての中学でありまた中学があつての大学である。若し出来得ることなら、立教でも小学から大学までの設備をすべきで、如此して初めて立教の教育が徹底し得べき「も」のである」<sup>(13)</sup>と述べている。杉浦の真意は、「中学のみの出身者でも立教大学の発展を冀ひ、大学の出身者も中学の進歩を計らねばならぬ」という「全学院の校友」の「一致団結」<sup>(14)</sup>にあったが、小学校を新設し立教の「一貫教育」を形成すべきとの志向は、まさに戦後の小学校構想と軌を一にするものであ

り、立教史のなかでも先駆的であったといえよう。

一九二三年九月、関東大震災が発生し、立教も大きな被害をこうむった。築地にある中学校は地震には耐えたものの、火災によって全焼してしまい、池袋の大学ではレンガ校舎群に被害がでた。学院首脳部は、アメリカ聖公会に対し救援を要請し、それを受けたアメリカ聖公会も緊急基金の完成を急ぎつつ、ジョン・ウツドラ宣教師を日本に派遣し再建計画の研究を進めた<sup>(15)</sup>。

翌年二四年二月、ニューヨークで開かれたアメリカ聖公会の全国協議会で、日本の状況を調査した派遣レポートが提出された。派遣レポートでは、立教中学校が立教大学の校舎で授業を再開し、午前は中学校、午後と夕方は大学が使用している現状が伝えられた。また協議会では、復興計画として、「立教中学校を立教大学に近い場所に移転するとともに、教育課程のバランスを完成させるべく同じ場所に小学校を設けること、また大学に必要な設備を完備すること」が提案された<sup>(16)</sup>。この提案は、立教中学校の池袋移転に加え、立教学院が構成する小学校を新設するなど、大学までのキリスト教による「一貫教育」の形成を示唆するものといえる。事実、アメリカ聖公会の宣教師である立教首脳たちが、当時日本での小学校創設を志向していたことは確かである。その一人がウィリアムズの後継者ジョン・マキムであった。

一九二四年三月号の『スピリット・オブ・ミッションズ』（アメリカ聖公会伝道機関誌）で、マキムは、「日本では小学校は不可欠」と訴えた。マキムは、「日本における我々の現在の教育制度は、七歳から一三歳という最も感受性の強い時期の子供に提供していないという点で欠陥がある」とみていた。そこには、キリスト教の幼稚園で「幼時の性格形成で極めて素晴らしい成果を上げ」ているが、「卒園して公立の小学校に入ると、多くが我々から離れ」てしまうとの問題意識があったからである。そのためマキムは、「幼稚園に入るときから大学を卒業するまで、キリスト教的な性格で教育し、神が思召す人生の段階でその義務を果たすよう訓練する学校を連続して形成する必要性を強く訴え」たのであった<sup>(17)</sup>。

なお、同誌は「常に我々の計画に含まれていながら、ミッションは震災の時点まで小学校の部を進展させることができなかった<sup>(18)</sup>」と書いており、小学校創設が以前からアメリカ聖公会内で構想されていたことがうかがえる。そして、立教学院総理チャールズ・S・ライフスナイダーも小学校創設の重要性を認識していた。同号の『スピリット・オブ・ミッションズ』で、ライフスナイダーは「キリスト教小学校―必要性とチャンス」と題し、「日本にはキリスト教の小学校がない」ので、「公立小学校の反キリスト教または非キリスト教的な雰囲気の中で

キリスト教徒として入学した」児童は「キリスト教から引き離され、おそらく永久にキリスト教には戻らないでしょう」と主張している。だが、道徳教育として公立小学校でキリスト教の教師がキリスト教の授業を行うとの東京市長の表明を「チャンス」と捉え、「キリスト教の小学校が日本国から歓迎されて、神と国家に対して素晴らしい奉仕ができるようになる」と喜んだ。ライフスナイダーは、それを「日本でのキリスト教教育の歴史において新しい時代の始まり」とみたのであった<sup>(19)</sup>。

## (2) 聖公会系小学校の設立

では、アメリカ聖公会を母体とする小学校はいかにして新設されたのだろうか。震災後の「日本再建計画」には、立教大学、立教中学校、立教高等女学校、聖路加国際病院のほかに小学校の項目が盛り込まれ、そこには、「二校の新設小学校（木造）、各\$六〇、〇〇〇、既にある土地に建設するか、ほかの項目に含める」とし、「\$一二〇、〇〇〇」が計上されている<sup>(20)</sup>。計画には、小学校を二校新設とあるが、結果的にその一つが立教小学校として具体化することはなかった。立教学院としては、大学と池袋に移転した中学校の復興が最優先であったため、小学校の創設まで考える余裕はなかったのだろう。

この後、小学校創設の主体となったのが、立教高等女学校であった。同校はウィリアムズとC・T・ブランシエーが一八七七年に創立したアメリカ聖公会系の女学校である（創立時は立教女学校）。築地にあった女学校の校舎は、立教中学校と同様焼失してしまい、池袋の立教大学に事務所を設け、立教学校出身で、元立教高等女学校教頭の石井亮一が創立した滝乃川学園の校舎で授業を再開した。

当時、副校長だったミス・ヘイウッドは先述の計画を念頭に女学校の用地探しに奔走し、一九二四年九月に久我山に用地を購入した<sup>(21)</sup>。これを受け、同年四月号の『スピリット・オブ・ミッションズ』は、「築地の旧敷地から西に一五マイルの所に、立教高等女学校のための新しい敷地約一一エーカー。これは立教女学校の新校舎のための場所を提供するだけでなく、男女の小学校も建てられ、それによって私たちの幼稚園とその上の学校の間の深刻なギャップを埋めることとなります<sup>(22)</sup>」と伝え

た。当初の計画では、同地に男女の小学校を新設するとされたが、その後、女子だけの小学校に変更された。その理由は史料上定かではないが、立教女学院小学校の沿革史では、「まず高等女学校のための木造校舎を（一九二四年に）建設し、（一九三〇年の）鉄筋コンクリート造り

の新校舎建設後、その仮校舎を小学校校舎として利用したことから結局は女子だけの学校となった<sup>(23)</sup>と分析している。そこには資金不足も作用したものと考えられるが、ともあれ、小学校の開校は決定し、一九三一年四月に「立教高等女学校附属尋常小学校」として発足したのであった。なお、同年一月号の『スピリット・オブ・ミッションズ』で、マキムは「近隣の家族の要望にこたえて、彼らの幼い子供たちのために今年（一九三二年）ミッションで初めて小学校が設立され」たことを報告している<sup>(24)</sup>。

他方、立教大学では、大学に昇格して以降、学生数の著しい増加に伴い、教室などの設備が不足し、「一流の大学たる地位を捨て、中流以下の地位を占むる」か否かの深刻な問題に直面することになった<sup>(25)</sup>。そこで一九三一年発足の財団法人立教学院理事会は、三三年八月に「立教学院拡張計画案」を策定し、満場一致で可決した<sup>(26)</sup>。同計画案摘要には、喫緊の設備として講堂、予科教室、大学本館の両翼、中学校寄宿舎、体育施設が挙げられている<sup>(27)</sup>。つまり立教学院は拡張を模索したわけだが、そこに小学校の創設は含まれることはなかった。その後、戦時期の立教学院では、一九四二年の聖路加国際病院との立教大学医学部設置構想に加え、四四年に立教理科専門学校（翌年に立教工業理科専門学校に改称）

を開設するなど、時局への対応が急務となっていた。それゆえ、戦前立教の小学校構想は立教首脳個人の考えにとどまるものであったと考えられ、その構想が計画として具体化するのには、敗戦後を待たねばならなかったのである。

## 二 戦後の小学校設立構想

### (1) 佐々木順三の構想

敗戦後の立教学院では、一九四五年一〇月二四日の「信教ノ自由侵害ノ件」により、三辺金蔵大学総長や帆足秀三郎学監兼中学校長ら学院幹部一一名の追放に加え、立教学院の再建と財団法人寄附行為に基づく運営が命じられた。学院は須藤吉之祐を暫定的に大学総長・工業理科専門学校長・中学校長の事務取扱として任命し、一月七日に「皇国ノ道ニヨル教育ヲ行フ」との寄附行為を「基督教主義ニヨル教育」に改正したが、本格的な学院の再建には専任総長を必要としていた<sup>(28)</sup>。

そこで候補に挙がったのが、聖公会信徒で、都立高等学校長の佐々木順三であった。以下、佐々木が立教に迎えらるるまでの経緯を簡単に触れたい。聖公会信徒の佐々木の名は、幹部追放後に立教内で話に出ていたように、佐々木はそれを「内々で断った」という。だが、学

院理事長の松崎半三郎が東京帝国大学総長の南原繁に人選を相談し、そこで南原が佐々木を推薦したことで、再び候補として浮上することになった。南原の打診に対し、佐々木は「私学の経験がないから、全く不適当と感じ」て何度か断りを入れたが、南原は、「大学は私立も官立もないんだ。新しい時代だから、僕もこうやっているんだ。一緒になって日本のために尽くそうじゃないか」と説得したという。それでも佐々木は総長就任を固辞したが、後日、師と仰ぐ須貝止主教からの懇請により、やっと決心し引き受けることになった<sup>(29)</sup>。

佐々木は一九四六年六月、大学総長・工業理科専門学校長・中学校長に就任し、挨拶のなかで「諸君の陣頭に立つて進み度い」と抱負を述べた上で、「大学に真理の源たる神に対する敬虔な心が動いて居らぬならば本当の大学では無い、立教の学生諸君が神を認めぬならば立教大学存在の意義が無い」と強調したのであった<sup>(30)</sup>。なお、アメリカ聖公会伝道機関誌『フォーース』一九四六年九月号には、「東京の立教学院に、立派なキリスト教徒で優れた学者の新総長が誕生した」とし、佐々木が「立教中学校および立教大学の再建に関して、いっさいの制限なく全権を委譲されている」<sup>(31)</sup>と掲載している。

立教学院の再建という大役を前に、佐々木は、「立教の再建は戦前の立教そのままの姿に戻ることはない。



昔よりもっと力強い学園になって、神と国とによりよく奉仕することである」と考えた。そこには、「こん度の戦争を中心として、日本の基督教徒が深く反省しなければならぬことは、戦前戦中を通して我々が甚だ臆病であり弱くあったこと」との認識があった。つまり、佐々木は立教が「基督教の信仰が希薄になって居た」ことを問題視し、その反省に立って「もう一度立教の教育を、この信仰の上にシッカリ樹立することを求められて居る」と捉えたのであった。<sup>(32)</sup>

そこで佐々木は、「大学を新設して学生に出来るだけ永く宗教々育を受ける道を開いた」元学院総理タツカールの理念を引き合いに出し、「新に小学校を設けて、六、三、三、四の全学制過程を一貫して宗教々育を施すことが、本筋ではないか」との「一貫教育」構想を立てるに至った。<sup>(33)</sup> ちなみに、一九〇〇年代初頭の立教では、独自の高等教育機関をもっておらず、立教中学校の卒業生を他の教育機関に手放さなければならぬ状況にあった。このとき大学部創設の必要性をいち早く訴えたのがタツカーであった。タツカーは、「私たちの教育活動には、さらなる関心を払うべきある弱点があります。現在のところ、私たちは〔中学校〕卒業後に少年たちをしっかりとつかまえておく手段をひとつも持っていないません」<sup>(34)</sup>と述べている。すなわちタツカーの理念とは、中学校と

大学を通して、キリスト教による教育を行う、いわば「一貫教育」の確立にあった。佐々木は、「立教に大学を設け、青年に善き信仰を保ちつつ学問の蘊奥を究める道を開いた」タツカーの「見識は、我々後輩が模範として深く学ばなければならぬことである」<sup>(35)</sup>と述べている。

先述した佐々木の「一貫教育」構想の基盤となるのが、小学校の創設であった。佐々木は後年、「本当に立教的になるためには、小学校を創設し「形の上で小学校から大学までなければいけないという感じがした」とインタビューに答えている。そこには、「立教が揺らいでしまったのだから、ちゃんとしたものを作らなければならぬ」との問題意識があったからであった。<sup>(36)</sup>

こうした構想は、佐々木だけでなく理事長の松崎も保持していたという。佐々木は、松崎との話し合いのなかで、松崎自身が「小学校を設けることを考えて居るのを知って、非常に共鳴と激励を感じた」<sup>(37)</sup>と述べている。佐々木によれば、松崎の構想とは、「一番初めの問題として、どうしても小学校を作らなければならぬ、再建の第一歩だ。つまり小学校がないということは、立教の全体の一貫した精神がなくなるおそれがある」<sup>(38)</sup>というものであった。松崎の伝記には、「宗教教育は、その幼年時代から行なうべきであるという信念から、立教小学校の開設を主張した」<sup>(39)</sup>との記述があり、それは、戦前の

立教首脳たちの構想と類似していることがわかる。松崎から「すぐ小学校を作ろうじゃないか」と言われ、佐々木は、「それでいきましょう」と応じ、<sup>(40)</sup> 小学校の創設を始めることになった。

だが、小学校創設には改革を求めるG H Qからの反対があった。敗戦後、G H Qは立教学院に対し再建を命じたが、それは文字通り「元通りに直せ」という意味であり、指令をめぐる解釈の相違がその根底にあった。そのためG H Q将校のポール・ラツシユ(元経済学部教授)は、「私は不賛成だ」と述べ、小学校創設は「reconstruction〔再建〕ではない」ので、「よけいなことを作るな」と反対したという<sup>(41)</sup>。また、アメリカだけでなく、大学当局の一部からも反対の声があったようだ<sup>(42)</sup>。その理由が何であったかは定かではないが、おそらく財政的な問題からの反対意見であったと推測できる。しかし、佐々木と松崎は、こうした学内の反対を押し切って小学校創設を断行したのであった。

## (2) 「学院拡張計画」と小学校構想

立教学院では、一九四六年一月二二日の理事会で再建プランとして「学園拡張案」の議論を始めた<sup>(43)</sup>。そして翌年二月二〇日の大学部長会で、佐々木総長は、「将来ノ本学院計画案」を説明した。その主な内容は、「日

本聖公会本部ノ教育機関ノ中心ヲ立教ニ置キ大学トシテハ神学部、文理学部、政経学部、法学部、医学部等ヲ設ケ小学校、総合グラウンド 寄宿舎ノ新設等廿年計画トモ云フベキプランを作成せる」<sup>(44)</sup> というものであった。すなわち、佐々木は立教大学の総合大学化に加え、小学校の創設やグラウンドなど施設の充実を図るといふ学院全体の拡張計画を表明したのであった。

この後、この拡張計画案がポール・ラツシユによつて、「立教学院拡張計画案」としてまとめられたことはよく知られている。その概要は、一九四七年三月六日の学院理事会で、鈴木威監事により発表されたが<sup>(45)</sup>、計画案の詳細についての記録はない。理事会での議論は、「拡張案実現の第一着手として」の「土地の入手」が中心であった。具体的には、立教通りの北側にある池袋第五国民学校跡地と現敷地に隣接する南側の土地(グラウンド新設計画のため)の買収・獲得である。前者は、前豊島区長の斡旋により、買収交渉が「ほゞ解決の見込み」である一方で、後者は、地主との買収交渉につき資金の調達が「急速には実現し得ぬ事」が説明されている<sup>(46)</sup>。

では、拡張計画案の内容とは、どのようなものであったのだろうか。それは、『立教大学諸申請書・認可書綴(Ⅱ)』所収の「文教地区指定申請に就いて」と題する文



書に確認できる。同文書には、立教学院による拡張計画の説明が付されている<sup>(47)</sup>。この計画案は、「敷地拡張」、「建設物」、「教育部門」等で構成されており、とくに「教育部門」では、次のような構想が明示されている。具体的には、「大学の建学方針をより完ふする為、初等学校を新設して中学——高等——大学と一貫し、進学に便利の道を拓き且つ建学方針の徹底を期する」というもので、小学校を創設した「一貫教育」の構築を謳っている。さらに、「此等のこと、併行して大学に医、理、法、政等各部を設けて名実俱に綜合大学として恥かしからぬ大学を造り上げる」<sup>(48)</sup>と付言している。以上は、まさに先述の佐々木による「一貫教育」構想を具現化したものといえよう。

この計画案をまとめたポール・ラッッシュは、小学校創設を「再建」ではないと反対していたが、同案に小学校の創設が盛り込まれたことから、次年度からの学制改革の実施に加え、中長期的な視野にたつて佐々木の構想をおおむね是認したと考えていいだろう。ただし、佐々木は後年、「ラッッシュというのはいい男で、理屈はそうでも、やり始めると一生懸命やってくれる。それで小学校をつくり出したら、初めはぐずったけれども、非常に世話して助けてくれました」と語ったように、まだ構想段階にあったこの時点で、ラッッシュが早期の創設を容

認したかは議論の余地があるう。

### 三 立教小学校計画の推進

#### (1) 学制改革と小学校計画

一九四六年四月のアメリカ教育使節団の報告書に基づき、教育刷新委員会が改善点を検討し、六・三制の改革が決定された。この方針を受け、文部省は学制改革に着手し、翌年四月から新学制が実施されることになった<sup>(51)</sup>。立教学院の再建は、まさに戦後の学制改革と連動していくのであった。

翌年二月には、文部省から「中学校は昭和二十二年度、高等学校は二十三年度、大学は昭和二十四年度から順次実施する原案で準備を進めている」との通達が出され、「義務制三ヶ年延長実施計画案」の閣議決定を経て、一九四七年度から三年制の中学校が設置されることになった。翌月には、東京都教育局が、新制中学校の設置にあたっての方針を傳達したが、ここでは、新一年から新三年で新制中学校を編成し、新四年と新五年は四七年度のみ中等学校の生徒として残るとの措置が示された。そして三月三十一日、教育基本法と学校教育法が公布・施行され、四月から新学制（六・三制）が実施された<sup>(52)</sup>。

立教中学校は一九四七年四月、四年生と五年生を校内

に残し新制中学校を設置した。制度上、一年から三年までが新制中学校、四年と五年が旧制中学校と位置づけられた。これは、先述の通達に沿った対応であったが、他の中学校が新制中学校を新たに創り、翌年に旧制中学校を新制高校に移行させたのに対し、立教中学校は新制高等学校を創設し、中学校の三年から五年までをそのまま進級させることを選択したのであった。<sup>(53)</sup>

立教では同年七月以降、学制改革に関する議論が進展し始めた。一九四七年七月一日の大学部長会では、「新学制委員会設置の件」が協議された。そこでは、「学院、大学、理事、中学、同窓会、校友会、維持会、神学院、聖ルカ病院、聖公会等より委員を選定」し、「七月中に一度委員総会を開くこと」が決議され、実務については、「学校直接関係者にて小委員会を組織して計画を推進すること」となった。<sup>(54)</sup> 以上からは、立教関係者だけでなく聖公会系の関係機関も併せて、学制改革に関する議論を進めようという大学幹部たちの志向がうかがえる。

では、先述の委員会では、いかなる議論がなされたのだろうか。第一回は「学制改革委員会」と称し、七月二二日に開かれた。委員会の冒頭、理事長の松崎は、「新学制対策委員会を組織し諸氏の協力を求める」とし、「個々の件に関しては小委員会を設け検討を願ふ」と述べた上で、「一般では立教に大きな期待をかけて居るし、

立教大発展の良い機会である」と明言した。次に、佐々木総長が、「当局並に他の学校に於ける計画等」を説明・紹介した。そのなかで佐々木は、「小学校を創設し来年度から概ね二組募集漸進してゆく事に理事会で決定して居る」と述べ、「小学校の次の三年制は中学校で発足して居る」と説明した。<sup>(55)</sup> この発言からは、小学校の創設が学院理事会で決定をみていることがうかがえる。

その後、小学校の創設が議論され、まず、「来年度より募集する事にして中学校で二組収容の余地ありや」との質問が出された。これに対し「今の所一組しか収容出来ぬ」との回答がなされたが、小学校の中学校校舎への収容は議論の前提であったことがわかる。次の「来年度から実施する事にしての準備如何」との質問に対しては、「九月頃から準備せねば間に合わぬ」との回答があった。こうした議論を経て、「一組五十名。(但男児のみ)」の小学校創設を「来年度より実施する事に決定」され、「至急小委員会を設ける」ことが確認された。そして最後に、佐々木が、「小学校は実現(来年度より)する事にして早速実行に移す、諒承されたい」と発言し、委員会での議論を終えている。<sup>(56)</sup> なお、第二回の委員会が八月八日に開かれたことまでは確認できる。<sup>(57)</sup>

## (2) 小学校創設の決定

こうして立教学院では小委員会が組織されていく。翌月二二日、「小学校新設二関スル委員会」を開き<sup>(58)</sup>、計画を推進し始めた。そして二五日の第一〇二回理事会で、「立教小学校新設の件」が協議され、「拡張計画中、先づ第一着手として明年度より立教小学校を新設し、其の敷地として一応、過般本財団の所有となつた元第五小学校跡約式千式百坪を当てる件」が「満場一致の賛成を得て可決」された<sup>(59)</sup>。次に、寄附行為の一部変更が議題に挙げられ、「拡張計画案に基づく小学校新設のため、又内外の情勢に鑑み、理事増員の必要を認め」、以下のような改正がなされた<sup>(60)</sup>。

第二条 財団法人立教学院は日本に於いて基督教主義による教育を行うを目的とし、学校令による立教大学、立教工業理科専門学校、立教中学校、立教小学校及び本法人目的達成のため必要な事業を維持経営すと改正した。

第四条 本法人に左の役員を置く

理事 八名乃至十三名（五名乃至十名を改める）、監事 三名

なお学校長任命の項に小学校長の任命を加えた。これらの寄附行為の変更は、一〇月二日と一三日の

「立教小学校新設委員会」を経て<sup>(61)</sup>、一〇月二三日付で、文部大臣宛認可申請が出され、その翌月の二二日に認可を受けている<sup>(62)</sup>。

九月二五日理事会の決定を受け、学院内では、早急に開設準備が進められた。そのなかで小学校設立の中心となったのが、文学部長の菅田吉と文学部教授の森脇要であった。菅は一九四六年四月に立教大学教授（文学部長）と立教高等女学校、同附属初等学校の校長を兼務し、女学院では翌年から小学校、中学校、高等女学校の校長を兼任していた<sup>(63)</sup>。同じアメリカ聖公会系の女学院の現職校長ということもあり、小学校創設にあたって菅の存在は貴重だったが<sup>(64)</sup>、実際のところ創設準備の実務を担ったのは森脇であった。

なぜ森脇が小学校創設の「責任業務」を担うことになったのだろうか。森脇によれば、佐々木総長から「だれも小学校のことを知らないから、森脇、君やってくれないか<sup>(65)</sup>」と直接指名を受けたようだ。佐々木も後年、「そういう方面（小学校の創設）のここのよくわかってる人ということで森脇さん」が、「一番いいということになったのです<sup>(66)</sup>」と語っており、発達心理学や臨床心理学を専攻する森脇を適任とみたと考えられる。また、この指名にあたって森脇は、「認可書をとるとするのは初めてだけれども、プログラムを決めたり、先生を

集めたい、やっぱりほかの人よりも発達心理や臨床心理をやっていたほうが便利だ、そういう意味でおそらく皆さんかなんかが『森脇君にやらせたらどうか』といったんじゃないか」と推測しており、「ほかに推薦する人はいないと思いますから」と付言している<sup>(67)</sup>。

こうして学院では、昔と森脇の二人を中心として、経済学部長の河西太一郎、中学校主事の花房正雄、小川徳治と中川一郎両教授、学院事務長の田中慎吾、大学総務部長の秦二郎などが設立準備に携わった。なかでも森脇と田中が都庁を始めとする関係方面と連絡交渉し、準備を急いだという<sup>(68)</sup>。なお、小学校新設の小委員会は九月二二日、一〇月二日、一三日に開かれたことは先述の通りだが、右記のメンバーが何れも「学校直接関係者」であることから、その構成員であった可能性が考えられる。

一月一三日、学院理事と学校側幹部の懇談会（以下、幹部懇談会）が、総長室で開かれた。会の冒頭、佐々木総長から開催の趣旨が述べられたが、その内容は記録されていない<sup>(69)</sup>。懇談会では、小学校新設、新制高等学校の新設、小学校の敷地などが議題に挙がっており、それを考慮すれば、学制改革と学院拡張の推進を意思決定していく上で、学院と学校側の幹部間の意思疎通を図る狙いがあったと考えられる。

では、小学校創設に関する協議はどのようなものであったのだろうか。まず、小学校校舎の問題であった。鈴木監事より、「種々の事情より見て校舎を新築する事は困難」とし、「一時大学又は中学の教室を一部使用する外ない」ことが説明され、その結果、「中学校を一時使用する事を決定」した。次に、敷地の問題であった。これについては、佐々木が「現在第一案 現在のテニスコート跡、第二案 大学正門前とあるも、何れを是とするやを提議し」た。前者は元教練場跡（現在の小学校敷地）、後者は池袋第五国民学校跡（現在の五号館敷地）を指すが、協議の結果、「第一案を最も理想的案と考へるとの意見」が多く、「新築まで更に研究する事を申合せた<sup>(70)</sup>。

右記の懇談会での協議を経て、二七日の学院理事会では、「小学校敷地変更の件」が議題に挙げられ、「旧池袋第五小学校跡に建設の予定であったが、立教学院敷地、元教練場跡に建設する方〔が〕適当であるとの意見多数のために教練場跡に新設の事」とし<sup>(71)</sup>、「校舎が建築されるまでは、立教中学校々舎の一部を使用すること<sup>(72)</sup>」が可決された。

### ③ 立教小学校の開設認可

小学校創設の当初の課題は、東京都からの認可を得る

ことにあった。立教としては小学校設置の認可申請は初めてのことであり、森脇も「まず認可をとるところからたいへんだった」、「認可をとらないと建築の資材の配給がない、資材の配給をもらいに行く」と認可がないとくれないし<sup>(73)</sup>と当時を振り返っている。他方、先述の理事会で、佐々木総長は「申請書類は文部省並に東京都に於て好意的に進行中である旨<sup>(74)</sup>を報告している。また、後年も「幸いにして都の教育局は立教の立場をよく理解し、非常に好意的に計らってくれ<sup>(75)</sup>」たと述べており、計画が順調に進んでいたことがうかがえる。

また、翌四八年一月六日の大学部長会では、「新学制に関し協議会を開き、必要なものから着手する事」とし、「小学校委員を定めること<sup>(76)</sup>」とし、「森脇氏を主事に」<sup>(76)</sup>することを協議している。そして同月一二日に「立教小学校委員会」が開かれ、その翌日に東京都知事宛「私立学校設置認可申請書」（総発第一五号）が提出された。以下、申請書の抜粋である<sup>(77)</sup>。

#### 設置要項

- 一、目的 本校はキリスト教の信仰に基き学校教育法に準拠して初等普通教育を施すを以て目的とする。
- 二、名称 立教小学校と称する。
- 三、位置 東京都豊島区池袋式丁目壹阡九拾九

#### 四、校地校舎 番地

- イ、平面図 別紙第一（イ）の通り
- ロ、校地 二、一九五坪八合一勺
- ハ、校舎 建坪 九六八坪三合
- ニ、建物の配置図 別紙第一（ロ）の通り

ホ、所有者の住所氏名

東京都豊島区池袋参丁目壹阡式  
百七拾式番地

財団法人 立教学院

代表者 理事長 松崎半三郎

#### 五、仮校舎

- イ、平面図 別紙第一（ハ）の通り
- ロ、校地坪数 千百拾参坪
- ハ、校舎建坪 式百拾式坪七合五勺

一の内五拾坪（教室二、職員室一）

ニ、建物配置図 別紙第一の（二）の通り

六、小学校教科用図書 文部省の定めたものを使用する。

七、学 則 別紙第二の通り

八、開校予定期日 昭和貳拾参年四月一日と予定する。

九、生徒（児童）の定員 孝学年について八拾名。

また申請書の教員組織表には、校長佐々木順三、主事森脇要、教諭田中きみ、教諭佐々木厚の名が確認できる<sup>(78)</sup>。この段階では、佐々木を兼任校長とし、実務を担う主事には森脇が就くことが想定されており、森脇自身も「小学校の校長（主事か）」をやってくれということだと思っていた<sup>(79)</sup>とインタビューに答えている。また、森脇は人事面でも奔走しており、例えば、奈良の高等女子師範出身の田中教諭は森脇の人選によるものであった。田中は、「小学校の創立を聞いたのは二十二年の六月で、それは森脇先生からうかがった」と回想しており、「七月に上京し、九月に総長先生にお会いし、創立のお仕事の手伝いをしてい」たという<sup>(80)</sup>。

少し先の話になるが、開校時の教諭で、後の第五代校長・伊藤高清も森脇が人選したものである。伊藤は立教中学校、立教大学（哲学科）出身であり、一九四三年二月に応召し、南方ジャワ島で終戦し帰国となった。敗戦後は、ポール・ラツシユの事務所（澤田邸）で一年ほど働いていたが、恩師の森脇より声がかかり、小学校で働くようになったという<sup>(81)</sup>。

話を戻すと、一月一六日には、東京都教育局普通課が「立教小学校新設ニツキ調査」に入り<sup>(82)</sup>、二三日に立教小学校の設置が東京都に認可された。なお、認可書に

は、条件として第一に「本校舎の建設を実施計画の通り実行すること」、第二に「豊島区長と連絡を密にし教育上遺憾のないようにすると共に就学事務については万全を期すること」が付されている<sup>(83)</sup>。

ともあれ、立教小学校の設置が認可されたことにより、四月の開校が目前となった。そこに森脇の尽力があったことは言うまでもなく、佐々木は、「森脇教授が大学講座をもちながら、繁雑な事務的手続の為、関係各方面を駆け廻って接渉された労苦は、特に感謝をもって記憶されるべきである」<sup>(84)</sup>と強調して述べている。

#### 四 開校準備の本格化

##### （一）新たな教員の招聘

開校まで約二カ月となり、佐々木は教員組織を再考するようになった。佐々木は、「出願当時急的なものを出してあったが、愈々本当に発足するとなると、改めて真剣に検討しなければならぬ」<sup>(85)</sup>と述べているが、その理由は次の通りである。

我々の小学校は単に義務教育を目的とする一般の公立小学校にはない特別の理念の上に立つものである。そしてこれを学校の組織と運営のうちに実現しなければ、存在の意味はないのである。今まで何に



もないところに、これを創造して行くことは並大抵のことではない。「中略」校長は学院の方針で、何れの学校も大学総長が兼ねることになって居たので、私が兼ねることとなったが、実際先頭に立って我々の信念を教育の上に具現する主事の役目は、新設学校の場合には全く貧乏暇なしの苦役でなければならぬ。大学の教授に兼ねてもらおうことも考えたが、それは学者をみすみす殺してしまうことである。学者方にはむしろ顧問格で助言してもらおう方がいいと考えるようになった<sup>(86)</sup>。

佐々木は、立教の理念、すなわち「キリスト教の信仰に基」く教育の実現を目指しており、それを「具現」化する主事の存在を重くみていた。当初は、森脇に大学教授と小学校主事を兼任させる案もあったようだ。佐々木は、「森脇さんが大学の教授という大きな仕事を持っていないで忙しくなかったら、森脇さんが主事として小学校創立の仕事を続けていたでしょう<sup>(87)</sup>」と述べている。だが、立教では、小学校と高校の創設に加え、翌年からの新制大学発足が新たな課題となっていた。それゆえ佐々木は、「森脇さんも新しい大学をつくるために忙しくしていたし、大学でも森脇さんは非常に大切な人としていた<sup>(88)</sup>」と語っており、森脇の代わりとなる新たな人材を探すことになった。つまり、立教における新学制へ

の移行が小学校の人事に作用したといえよう。

そこで候補に挙がったのが、有賀千代吉であった。有賀は一九二〇年、立教大学商科を卒業し、満鉄（南滿州鉄道株式会社）入社後、カナダ・バンクーバーに渡り、現地の新聞記者となった人物である。アジア太平洋戦争の開戦後、有賀はカナダ当局に拘禁されて収容所に送られたが、その後、第二次交換船によりシンガポール経由で日本に帰国した。帰国後は、イギリス軍司令部の管理事務所で通訳として勤務していた<sup>(89)</sup>。

なぜ有賀だったのだろうか。以下、その経緯をみていく。有賀を立教に招聘したのは、総長の佐々木であったが、当初は有賀のことを「ちっとも知らなかった<sup>(90)</sup>」ようだ。そのなかで有賀の名前が浮上してくる。森脇は、当時、学生部長だった小川徳治が「有賀さんを引っぱってきた<sup>(91)</sup>」と述べているが、そこに元チャプレンの桜井享（当時は学生部勤務）の推薦があったことはあまり知られていない<sup>(92)</sup>。桜井は、「徳さんに、有賀さんあたりをやつてもらったら非常に意味があるんじゃないかって、積極的だし、色んなことをやっていたし、それを僕は強調した<sup>(93)</sup>」と述べている。実のところ桜井と有賀は、シンガポールのマライ軍政監部の事務所で知り合っただけであった。桜井は、「有賀さんから、これこれこういうわけで意味のある生涯の仕事を捜してくれない

か」と頼まれたこともあり、小川に推薦したという。これに対し小川は、「桜井君の言うとおりだ、早速上に話してみるか」<sup>(94)</sup>と応じ、佐々木に伝えたのであった。

佐々木は、「古い立教の卒業生で、須貝主教から洗礼を受けた熱心な聖公会員で、立教を出てからカナダに渡り、今次戦争の勃発するまで三十年も、文筆と教育を通して、在留邦人の幸福のため働き続けて来た人」で、シंगाポールでは、「収容されて居た外人捕虜の子供達の教育を引受け」、「最後迄忠実に任務をつくし」たその経歴と熱意を聞き<sup>(95)</sup>、まさに有賀が適任と感じたようだ。加えて「外国の小学校のことをよく知っているという話」もあり、「この人に委せてみては」と「みんなに諮ったら、やってもらおうということになった」<sup>(96)</sup>と回想している。

そこで一九四八年一月半ば頃、小川は有賀に電話し、「佐々木総長が面会したい」旨を伝えたのであった。有賀によれば、立教小学校については「設立認可も大体見当がついていて、世間的にも話題となっていた」し、加えて、桜井から自身が候補に挙がっていることを事前に聞いていたという<sup>(97)</sup>。

一月末、有賀は母校・立教大学を訪れ、総長室で佐々木から「小学校の創設に参加してもらいたい」と正式な依頼を受けた。しかし、有賀としては、海外生活が長く

日本の事情に疎いこともあったが、それ以上に「無一物になって帰国して来た引揚者」であり、四人の家族を抱えるなか、進駐軍からの特典や高給を捨て母校に奉職する勇気がなかったようだ。そのため、有賀は「考えて見ます」<sup>(98)</sup>とだけ答えて会談は終了となった。

その後、佐々木と小川は、再び有賀を立教に招いて、「立教小学校だと外人との交渉上英語がしゃべれる人が必要」<sup>(99)</sup>だと改めて説得を試みた。後年、佐々木は「この頃になってきますと、アメリカとの交渉もうまくいくことが考えられなくてはいけなかったのです。そんな意味からも、有賀さんがいいだろうということになったのです」<sup>(100)</sup>と語っており、アメリカを意識した人選でもあったようだ。だが、このとき有賀は「まだ自分の心には決断しかねるものがあつた」という。そこで、佐々木が「あなたも立教の卒業生でもあるのですから、この際母校のために決心していただきたい」と強く要望した。有賀は、この「母校のために」の「ひと言にどのような犠牲も忍ばなくてはならぬ」との考えに至り、受諾した<sup>(101)</sup>というが、後年には、「小川先生、総長から色々攻められて、とうとう交渉を受諾した様な次第です」<sup>(102)</sup>と振り返っている。

佐々木たちの熱意に負けたという面もあるが、様々な相談者からの助言が、有賀に決断を促す要因になった

とも考えられる。有賀はその一人として、ポール・ラツシユの名を挙げている。ラツシユは、有賀に対し「いま日本は、これからの国を背負っていく立派な国民を教育するために大事な時期だ、日本をほんとうの民主国家にするにはクリスチャン・デモクラシー以外にはないんだ、お前は自分がクリスチャンだと思っているなら、立教に行つて小学校をやれ」と強く助言したという。なお、有賀は二月一日付でイギリス軍司令部の管理事務所から辞表を提出し、翌日より小学校開校に着手し始めるのであつた。

こうして、有賀という後任を得、佐々木は森脇にその旨を伝えた。森脇は、佐々木から「後任がちゃんと見つかりましたから、森脇君もうけっこうです」と告げられたことを振り返り、複雑な心中を語っている<sup>(104)</sup>。森脇は、当初より主事を任されたこと認識しており、それを念頭に開校後も小学校の教育・運営に携わる考えであつたといえる。そして先述の通り、森脇を中心に小学校が創設されたといつても過言ではなく、そうした自負もあつたと推測できる。森脇としては、この段階での通告に納得できなかったようだが、それ以上のことは語っていない。この後、森脇は大学専任となり、小学校の開校は有賀を始め、他の教員の手任せられるのであつた。

開校時、有賀は教頭に就任し、主事には、アメリカ聖

公会信徒のマーベル・ルース・シエーファーが就くことになつた。シエーファーは、一九二二年に來日し立教高等女学校で英語を教え、二四年から立教中学校で教鞭をとり、加えて伝道にも熱心で、立教大学聖歌隊の指導や中学生への宗教教育などに積極的に取り組んだ人物である<sup>(105)</sup>。シエーファーの人物像については、「先生は厳格なので有名」だが、「個人的にはやさしく、思い遣りのある人で感激させられる事もよくあつた」という。第二次大戦中は、フィリピンで一時抑留されるが<sup>(107)</sup>、敗戦後は、一九四七年一二月に高等女学校に着任した<sup>(108)</sup>。

森脇によれば、シエーファーを立教に招聘したのは小川徳治であつたようだ<sup>(109)</sup>。では、なぜシエーファーを主事に任命したのだろうか。その背景には、シエーファーの戦前立教での経験だけでなく、有賀の場合と同様、アメリカへの意識があつた。それはつまり、「アメリカとの関係を密にするという政策上からであ」つて、「そんなことも資金のないばかりに、考えなくてはならなかつた」<sup>(110)</sup>と有賀は述べている。その後、一九四八年二月一六日の午後二時、中学校校長室で、シエーファーの「歓迎茶話会」が開かれた<sup>(111)</sup>。

なお、二月一九日の幹部懇談会では、「外人教師」の件が協議されている。そこでは、「単に英語を教えるという丈でなく、それを通じて学校の特室を生かしたい」

との意見が出された。そして協議の結果、英語は「小学校から実施」し、「唱歌 英語〔を〕初めから」教える、中学校では「オーラル・メソッド」、予科では「一年に力を入れ」て会話を中心とし、二年以上は「アメリカ史学」を実施すること、などを決めている。ちなみに小学校の担当には、大学教授のカール・ブランスタッド、中学校の担当には、リチャード・メリットの名前が挙げられている<sup>(112)</sup>。

## (2) 開校準備の始動

二月初旬、校友会館（現診療所）二階では、石井孝と田中慎吾が設立事務の仕事を始め、その間に校舎の建築や設計の相談も行っていった。また、田中きみは二月一日に辞令を受けたが、「二月は殆んど仕事という仕事がなく、立教女学院の小学校で、一週間の中、半分位行つて、これからの勉強の下準備」を進め、加えて先述の設立事務の手伝いも行っていたようだ。三月に入ると、金子洋子と伊藤高清が時々出勤し、有賀を中心に開校の準備に本格的に取りかかった<sup>(113)</sup>。有賀は当初、「学院の方で、色々準備をしているのだろうと思うて、のんびりしていた」ようだが、佐々木から「君が何もかもやっていかななくてはならないんだ」と言われ、「大あわてで、バケツやホーキ、教材などの買出しに走り、その

ほか教材作りなどを急いだという<sup>(114)</sup>。なお、伊藤は「とにかく小学校を建てる頃は、とにかく有賀先生を中心にして、我々がみんな協力してやっていこうっていう姿勢がすごく強かった」と回顧している。

有賀によれば、二月初旬の都内の各紙は、立教小学校の児童募集の広告を掲載していたという<sup>(116)</sup>。例えば、八日付の『毎日新聞』には、次のような広告が掲載されている<sup>(117)</sup>。

### 立教小学校（新設）児童／募集

一、募集人員 八〇名（男児）

一、受 附 二月中

一、考 査 三月六日

また時期は不明だが、NHKが七時のニュースで立教小学校の創設を放送しており、伊藤は「それがいい宣伝になったのか、入学試験としては、もう时期的に遅かったが、応募した者はかなりいました」と回想している<sup>(118)</sup>。なお、入学試験には二八日の締切までに一六五名もの応募があった<sup>(119)</sup>。

こうして三月六日に、中学校木造校舎で児童の「知能検査及び父兄面接」が実施された<sup>(120)</sup>。有賀たちは「こうしたことに余り馴れて」おらず、また「必要な人員も不足していたので、予め女学院小学部の先生方に応援を求めて」いたという<sup>(121)</sup>。その翌日、校友会館の学院事務所

二階で、佐々木校長の司会のもと判定会議が開かれ、八四名を第一次合格者として選定した（八日発表）。九日には、合格した児童の体格検査を行い、レントゲン撮影は電気会社のストライキにより入学後となった。そして一二日、本館下で第二次合格者が発表された<sup>(122)</sup>。またこの前日には、「職員一回で、立教女学院を参観」<sup>(123)</sup>しているが、おそらく小学校開校に向けた研究・調査の一環であったと考えられる。そして一五日に「入学手続」の「大部分」が完了したため、あとは「入学式及び授業時間表について」の案を作成し<sup>(124)</sup>、一七日の職員会議を迎えた。

三月一七日、総長室で、第一回職員会議が開催された。出席者は、佐々木校長、小川学生部長、竹田鉄三チャプレン、花房中学主事、ブランスタッド、シエーファー主事、有賀教頭、田中教諭、伊藤教諭、金子教諭兼事務の一〇名であった。主な議題は、入学式に關してであった。以下、その事項である。<sup>(125)</sup>

- 一、児童及び父兄は四月六日午前九時半までに大学二十四番教室（本館）に集合せしむること
  - 二、午前十時チャペルにおいて入学礼拝を行うこと
  - 三、十時半二十四番教室において入学式を挙行すること
- こと、司会は有賀教頭とし、教頭による職員紹介、佐々木校長及びシエーファー主事の挨拶

#### 四、終つて中学木造校舎内の臨時教室に誘導三時半閉式のこと

立教小学校の六十年誌によれば、この会議で、シエーファーは学校経営の方針を指示し、

あなたがたは、どういふつもりでこの小学校の教師になろうとしていますか。

子どもの教育に当たる者は、ピアノを弾き、音楽の素養のあることが必須条件です。

と、「厳しい教育理念」を示したという<sup>(126)</sup>。こうした発言からも教育者としてシエーファーの確固たる理念をうかがうことができる。なお、田中きみは、シエーファーから「一人一人あなたピアノはどれくらいひけますか、歌はどれくらい、歌えますかということなど聞かれて大へんだと思った」とし、「アメリカでは小学校の先生と云うのは、そういうことを全部できなければだめなんだそうです」と回顧している<sup>(127)</sup>。

そしてシエーファー以外にも、有賀の行動力、実行力は著しいものがあつたようだ。田中は「あのころ有賀先生が何でもお考えになつたことを、すぐにどんどん実行に移されることはとても感心しました」と述べている。それは、有賀曰く「ずいぶん毛色の違つたようなやり方」であつたが、佐々木順三は「思つたことをどんどんおやりになる」と有賀たちを評し、「金子さん、伊

藤君それから田中さんはずいぶん骨の折れることだろうと思つて心配してましたよ。一向そういうこともなく、てみんな一生懸命になつてやつていた」と振り返つてゐる。<sup>(128)</sup>

職員会議の翌日、有賀は田中、伊藤の両教諭と神田の書店、運動具店、銀座の教文館へ買い物に出かけた。二一日には、等々力にある有賀宅で、職員会議を開いている。そして二四日からは、「仮校舎の内部のペンキ塗を清水組の奉仕で始め」た。<sup>(129)</sup> 佐々木順三は、仮校舎の教室」を如何にも小学校の教室らしく美しく彩色して、四月の開校に遺漏なく備えた」<sup>(130)</sup>と述べている。ちなみに、仮校舎とは、先述の立教中学校の二階建木造教室であり、階下三室を小学校が借用した。敗戦直後は、豊島区役所が使用しており、「床も壁も荒れ放題になつていた」という。有賀は、清水組勤務の旧友に対し「清水組としては何とかして仕事が欲しい所であつたらうが、それにはふれず、仮校舎の美装について『奉仕しないか』と話し、内諾を得た。だが学院当局からは「そんなことされては今後の仕事を清水組にやらなくてはならなくなるではないか」との苦言を受け、有賀は「建築のこととは別に考えてもらふこと」とし、「室内の塗装に奉仕してもらふことにした」。教室は、「薄い緑色に塗られ」、「見違えるように綺麗になつた」という。仮校舎には、

児童のみが使用できる門が造られ、そこに「立教小学校」（松崎理事長筆）の看板が掲げられた。<sup>(131)</sup> なお、新校舎は翌年三月に完成するが、それについては後述する。

このように開校の準備は着々と進められたが、調理室の整備や児童の制服や制帽をどのようにするかなどの課題が残されていた。以下、『十年史』をもとにその概略を述べていきたい。

まず、調理室の問題である。小学校では全児童に保健上給食を出すこととなり、調理室の設備を整える必要があつた。仮校舎ということもあり、永久的なもの費用上難しかつたが、衛生面を考慮し、地下室の小部屋をそれに充てることになつた。だが、生徒用便所の側にあつたため、調理室としては「不衛生であり、お粗末なもので」あつたようだ。<sup>(132)</sup>

なお、給食は、主食はなくミルク・みそ汁、シチュー、煮付けなどであつた。『PTA通信』第一号には、「往々にして給食は、まづいという評判をききます」が、「そうならないために学校ではできるだけ努力を致します」とある。<sup>(133)</sup> この給食について伊藤高清は、「今のように、子どもが喜ぶ給食を用意するのではなく、栄養補給が目的だつたから、学校で出した物は、まずくても、みんな食べなくてはいけませんでした。だから子どもは、食べるのに苦労していたし、先生も食べさすの



におだてたり」したと語っている<sup>(134)</sup>。第一回の給食は、五月四日からであった<sup>(135)</sup>。

次に、制服と制帽の問題である。まず、制服は、従来の詰襟・金ボタン型ではなく、背広型にするとの意見が圧倒的に多く、それに決定された。次に、制帽については、ライフスナイダー夫人より、ポイイスカウトの制帽見本が届けられたため、それに基づいて紺色を採用し、住田帽子店に見本を注文することになった。ただ羅紗地の入手が困難であったため、ポール・ラツシュに協力を求め、その結果、アメリカから生地を取り寄せることになった。だがその到着が三月半ばであったことから、全ての児童に制帽が渡ったのは四月二二日であったという。一方、制服地は布地の量も多く入手が簡単ではなかったため(「主事日記」一〇月四日には、「貿易庁、三越その他をかけ廻る」とある)、翌一九四九年二月二七日に制服とオーバーとともに配給することになった<sup>(136)</sup>。

## 五 立教小学校の開校

### (1) 組織・理念・教育方針

開校時の教員組織は、以下の通りである。佐々木を兼任校長とし、チャブレンにも中学の竹田が兼任、主事にシエーファー、教頭に有賀という布陣であった。なお、

顧問として、小学校構想に携わった学院、大学、中学校の幹部六名の名前が確認できる。立教初の小学校ということもあり、顧問という役職を設けた側面もあろうが、それ以上に学院の「一貫教育」の確立という意図もあつたと考えられる。

校長 佐々木順三

チャブレン

竹田鉄三

主事 マーベル・ルース・シエーファー

教頭 有賀千代吉

教諭 伊藤高清、田中きみ、リチャード・

メリット、カール・ブランスタッド

事務 金子洋子

臨時嘱託 石井孝

校医 河辺秀雄

健康管理 常葉恵子、寺島昭子

顧問 花房正雄、秦二郎、菅円吉、森脇要、

中川一郎、小川徳治

入学式直前の四月一日、田中教諭が怪我で入院したため、金子教諭が臨時の担任となった。当初は、田中教諭の復帰後は担任の交代を想定したが、田中の申し出もあつて金子が正式に担任となり、伊藤教諭とともに教育に当たることになった。また有賀は、二日に佐々木から事務長兼任を伝達され、教頭だけでなく事務長としての

役割も兼ねることになった。<sup>(137)</sup>

こうして四月六日に第一回の入学式が催された。入学式前の礼拝次第は、次の通りである。「聖書朗読、マルコ伝十章十三節より十五節まで。お歌(童謡)竹田司祭。話(神様のおたてになった学校)。祈禱。聖歌三六〇」<sup>(138)</sup>。また当日の「主事日記」には、「入学式を無事に行い、午後二時半散会する」とある。

同日発行の『PTA通信』第一号で、有賀は「良い子供」と題し、次の文章を載せた。有賀は、「私共は与えられた八十二名の幼な児と共に新なるボーイスタウンを創設した。その目的はけがれなき彼等のたましいをけがれなきままに成長せしめ眞に神の子にふさわしき者として新日本建設にあたらしめようというにある」と高らかに宣言した。そして有賀は、「こうしたメンタル・ハイジーンの問題に考慮を払い愛と犠牲を以て自ら児童と世の模範たらんとする職員によつて教育されている学校は少ない」とし、「ここにこの学校の特色があり誇りがある」と述べた。その上で、児童の両親に対し、「キリスト教とその持つ精神に対して充分なる理解を持たれ、父兄自らの宗教の如何を問わず児童をしてキリスト教徒た〔ら〕しめんとするの理想を以て教育に当る職員の真剣なる気持にとけいつてい〔た〕」<sup>(139)</sup>と協力を求めた。総じて、有賀は「日本を救う道はこうしたも

のから生れでる力に頼るよう他にない」とし、「父兄の方々と共に、今さんくたる日光の恵みをうけて二葉を出した八〔十二〕名の児童を健かなるままに育てあげたいと強く念願し」たのであった。<sup>(140)</sup>

右記のなかでもとくに「学校と家庭の関係」については、主事のシェーファーが『PTA通信』第二号で、次のように強調して述べている。シェーファーは、「立教学院が創立された目的は日本の青年をしてキリスト教に基礎をおいて教育するにあり」、「此の小学校は立教学院の中に建てられた第三番目のものであります」と学院の理念を示した。その上で、「小学校は一番家庭との密なる連絡が必要であります。そして家庭はそのために責任を持たなくてはなりません」と述べ、「各父兄の方々は、私共の学校が何うゆう目的で建てられたかをはっきり知つて下さらなくてはなりません」と家庭への自覚を求めた。すなわち、家庭の協力なしに立教小学校の理念は成し得ないということであった。最後に、シェーファーは「私は皆さんの御協力の成功がやがて日本をになう人々を送り出す事になることを信じます」と述べ、文章を締めている。<sup>(141)</sup>

こうした理念・教育方針をもとに、立教小学校は開校されたのであった。四月二八日の学院理事会で、佐々木順三は「立教小学校、新制高等学校が予定通り新学年よ

り発足した事及びその機構と現状」について報告している<sup>(142)</sup>。すなわち、立教では新制の小・中・高による「一貫教育」体制（大学は翌年）が整ったのであった。

## （2）草創期立教小学校の特徴

四月七日、立教小学校での授業が開始された<sup>(143)</sup>。先述の通り伊藤と金子の両教諭が担任、ブランスタッドは英語による音楽、有賀とメリットが英語、聖書を竹田チャレンが担当した。主事のシェーファーは開校後間もなく入院し、帰米を余儀なくされ、八月一日に永眠した。一〇月二日には、午前に大学チャペルでシェーファーの記念聖餐式、午後には記念会が催され、佐々木やポール・ラッシュが追悼の辞を述べている<sup>(144)</sup>。なお、主事には翌年一月より有賀が就任することになった<sup>(145)</sup>。

さて、開校後の立教小学校では、学科のなかでもとくに英語教育に力を入れた。ブランスタッドは、『PTA通信』第二号で、次のように述べている。

日本では小学校で英語を教へるといふことは新らしい試みであります。又外国人による音楽教授ということも小学校に於ては初めてのことであります。然し立教小学校ではこの二つを同時に実施することによつたのであります。こうすることによつて多くの利益があります。子供自身の声乃至は耳に故障のな

い限り、すべての子供達は自然に歌ひ、その結果、外国の簡単な言葉を習ふのでありますが此のような新らしいものは幼ない者にとつては容易であるばかりでなく英語を正しい発音で話すのに利するところが大いのであります。こうしておけば中学から高等学校の様な上級の学校に進んだ場合、幼い頃おほえた間違つた発音をなおすために時間を空費すると云ふような事がなくてすむわけであります。立教小学校に於ける音楽は英語で教へていますが子供達の身辺にあるものを英語であらわし、それが子供達に易々と云ひ得る迄繰返し／＼教へるのであります。こうして段々むづかしい語言葉を加へて参ります。が、一年間は余りむづかしい言葉は教へません<sup>(146)</sup>。ブランスタッドは幼少期の英語教育として、「正しい発音で話すこと」を重視したのであった。ちなみに有賀は、「日本語による教科書さえない時代のことであるから、英語などは全くどうにもしようがなかった」ので、「英語教師が教えたことを、翌日PTA通信に書いて、こういう英語を習つた、ということを両親に伝えることにした」が、ブランスタッドは「発音がくずれる」という理由で禁止するほどの徹底ぶりであった<sup>(147)</sup>。

その一方、有賀の発案により、立教小学校の特徴というべきものが始まつた。

まずは、絵日記である。小学校では、児童たちに毎日絵日記を書かせた。伊藤高清は「これをかかせることで、教師には子どもの普段の様子が分かって、指導のよい参考にもなりました」<sup>(148)</sup>と語っている。この絵日記は、二段組で、上段に絵、下段に文字を書くこととされ、「毎日の楽しい記録」を「思うままにかかせ」たようだ。そこには、「できるだけいいものが生まれるようにみんなので子供の生活を豊かに」する狙いもあったと考えられる。以下、『PTA通信』第一号掲載の「絵日記について」を引用する。

「絵日記について」

○絵日記は毎日つけましょう

○上段は絵、下段は文字。はじめのうちは絵だけで結構です。

○クレヨンでいいねいに。紙が悪いから下敷をしいて

○子供の毎日の楽しい記録です

○子供の思うままにかかせて下さい

○わりに教えることはよくありません

○然しできるだけいいものが生まれるようにみんなで子供の生活を豊かにしましょう

○かき損じてでも決して紙をやぶかないように

○毎日の日付をいれることはおうちでみてあげて下さい

○表紙は別の紙をかぶせて丈夫にして下さい。<sup>(149)</sup>

次が、キャンプである。伊藤によれば、有賀には「小さい時から、自立の精神を育ててはいけない」との考えがあり、一年生を夏のキャンプに連れていくことを決めたという。<sup>(150)</sup> その有賀は、「教師と児童とが、二十四時間の生活を共にすることの出来る、唯一の場所」と捉え、「寝食を共にしている時、更により以上のその児童の持っている個性を学びとることが出来る」と認識していた。すなわち、有賀にとって「キャンプングは実に教育の実践場」であった。<sup>(151)</sup>

六月五日、有賀は「東山荘におけるキャンピングの打合せ」を行った。計画の概要は、次の通りである。四〇数名の児童を引率し、八月六日から九日までの日程で、静岡県東山荘にてキャンプを行う。持参するものは、米一升、新聞紙二、三枚、石鹸一個、タオル、着替え。同伴者は、有賀、伊藤、金子、常葉、河辺校医など。そして八月六日、東京を出発し、御殿場で降り、そこからバスでキャンプ地東山荘に移動した。<sup>(152)</sup> 引率した伊藤は、「本当に大変でした」と振り返っている。その理由が「夜の起こし」（夜に児童をお手洗いにつれていくこと）であって、各児童を一時間毎に起きなくてはならず、教員の方が逆に寝不足になってしまったという。また、キャンプの後半には「親が恋しくなる」児童もでて

くるため、ここでは、「親のかわり」をしなければならなかったようだ<sup>(153)</sup>。この教育について有賀は、「父兄から好評を受けた」が、そこで「養われた自治性は、帰宅後二(一)三日で崩れてしまう様子である」と述べている。だが、「回を重ねるに従って、一人一人いろいろの面に進歩の跡が見られ好果は認められる」とし、「教育的な見地から」評価したのであった<sup>(154)</sup>。

なお、七日の夕方、児童たちは秩父宮雍仁夫妻を訪ねている。戦時中に生まれた児童たちは、「宮様という言葉」を知らず、「おじさん、おばさん」と呼んでしまったようだ<sup>(155)</sup>。では、なぜ秩父宮邸を訪問できたのだろうか、どのように訪問をアプローチしたのだろうか。筆者は宮内庁書陵部所蔵の公文書を調査したが、管見の限り、立教小学校と秩父宮家の関係を示す記録は残されていない<sup>(156)</sup>。開校時より始まった小学校の児童と秩父宮夫妻の御殿場での交流は翌年以降のキャンペーンでも続くことになった。

そのほか学校行事として、井の頭公園への遠足(五月二一日)、第一回母の日(五月九日)、バザー(一一月二七日)、クリスマス祝会(一一月二五日)などが挙げられる<sup>(157)</sup>。

このような模索のなか、立教小学校の開校初年度は進んでいった。そして一一月に入ると、第二回生の募集を

始めることになった。同月一日に入学願書の受付を開始し、二七日から応募児童の第一回体格検査を行っている<sup>(158)</sup>。翌四九年一月八日には、第二回の入学審査を実施し、一〇日に判定会議を開いた。この会議には、佐々木校長を始めとし、顧問の秦、小川、中川、菅、森脇、花房のほか、小学校からは有賀、伊藤、宮崎申郎(元外交官、小学校では事務長兼英語担当)が出席している<sup>(159)</sup>。顧問のメンバーは開校時の判定会議にも参加していたが、小学校の教員だけでなく各校の教員が判定会に加わる意味は何であろうか。草創期ゆえ、小学校の教員は入学判定の経験が浅いという面もあろうが、それ以上に学院全体で審査しようという考えもあつたのではないだろうか。それは、「一貫教育」体制を立教に根付かせるための方策でもあつたのではないか。なお、この判定会では八四名、補欠四名を選んで散会となり、翌日に発表された<sup>(160)</sup>。

立教小学校の校舎については、立教中学校の木造校舎を借用しているため、新たな校舎の完成が待たれた。資金の調達など新校舎建設の過程についての詳細な検証は、今後の課題とし、以下では概略を述べ、本章を終えたい。

一九四八年三月一日の幹部懇談会では、同年九月の竣工を予定していた<sup>(161)</sup>。四月一二日には、設計案(A

案)が建設委員会で承認されたが、資金の問題や業者の選定(のちに、清水建設)、そして東京都建設局の認可申請もあって、計画はなかなか進まなかった<sup>(162)</sup>。こうしただなか、二学期に入って新校舎の第一期工事に着手し、九月二日に地割式が行われた。そして二〇日の定礎式では、松崎理事長が「神と国とのために、昭和二十三年九月二日」(松崎筆)と刻まれた石を定礎し、その土台石の中には第一回生、父兄、教職員、学院理事、立教関係者の名簿のほか、聖書が入れられた。一九四九年三月、新校舎(第一期工事)が完成し、一日に仮校舎から新校舎に移転することになった。一三日には新校舎の開校式が行われ、翌日から授業が始まった(一八日で三学期終了)。この日の様子を記した「主事日記」には、「子供達八十二名は広い校舎内を飛び廻っている」とある<sup>(163)</sup>。こうして新年度に入り、四月四日に入学式が挙行され、立教小学校の二年目が始まるのであった。

## おわりに

立教学院の「一貫教育」構想とは、戦前から脈々と続く理念であったことは間違いない、<sup>(164)</sup>「キリスト教に基づく教育」を立教でいかに定着させるかという志向そのものであった。それは、敗戦後の混乱のなか立教出身者以

外の聖公会信徒であった佐々木順三の手によって実現されるのであった。

佐々木は立教学院の再建を戦前への復帰ではなく、学院を拡張させることによって果たそうとした。その基礎とされたのが、小学校創設による「一貫教育」体制の構築であった。こうした佐々木の理念は、学制改革による新学制への移行と連関し、一九四七年から四九年にかけて形となった。すなわち、学制改革が小学校の創設に代表される立教学院の再建を進展させる結果になったのであった。

そのなかで小学校の創設は、佐々木と理念を共有する理事長の松崎、認可事務に奔走した森脇を中心とした教職員、そして小学校の基礎を創っていく有賀たちの存在なくしては立ち上がらなかつただろう。まさに小学校は、学院をあげて創設された大事業として位置づけられるものであった。

では、そこで志向された立教学院の「一貫教育」のあり方とはどのようなものであったのだろうか。それについては、佐々木が小学校の一〇周年を回顧する座談会で、次のような見解を示している。

小学校が上の学校の付属になってはいけないという考え方、それは非常に大事なことだと思うのですよ。立教の建学精神というのが小学校は小学校、



中学校は中学校、高校は高校、それぞれの年令の子供を教育する上に、その根本精神に従ってどういふふうなやり方をしたらいいかということとは、各学校の当事者が考えていかなければならぬ。「中略」一貫教育というのはキリスト精神という根本的なものが一貫していくので、やることはそれぞれ違うんだから、そういう趣旨のもとにおいて、それぞれ小学校は小学校として完全なことをする。中学校は中学校。高校は高校。それを上の学校に持つていけばそのままはまるということは、本当の一貫教育ではないという意味から、今でも私は小学校は小学校として、中学校へ持つていけばそのままはまるということではなく、中学校も高校もそうであってはいけないと思つてゐる。すべての教育を大学に合うようなやり方にするということじゃない。各学校が一貫的にキリスト教精神という根本精神にのつとつて、小

学時代にはこういう教育をしたらいい。<sup>(165)</sup>

佐々木にとつて「一貫教育」とは、各校におけるキリスト教精神の一貫性であり、そのなかで各校が一種の自立性、独自性を發揮していくべきものであった。すなわち、「全体がそれぞれ立派な個性を持つて、しかも一貫する精神を貫くということが、立教学院の教育」と捉えたのであった。その上で、佐々木は「お互いに自己を主

張しながら、しかも貫くものは建学精神でお互いに調和していくということ」、その点において小学校の貢献を喜ぶのであった。<sup>(166)</sup>

総じて、立教小学校は、敗戦後の立教学院の再建と「一貫教育」構築の基礎をなすものであり、建学の精神である「キリスト教に基づく教育」を根付かせるといふ学院全体の期待のなかで、戦後の学制改革とも連関し創設されたのであった。そして学院の理念に基づく小学校独自の教育が模索されるなか、立教学院のなかの小学校という枠組み、すなわち「一貫教育」体制の基盤が形成されていくのであった。

#### 註

- (1) 豊田雅幸「立教学院における新制大学への移行―理学部開設問題を中心に―」(『立教学院史研究』第三号、二〇〇五年三月) 一一七頁。
- (2) 三羽光彦「六・三・三制の成立(岐阜経済大学研究叢書)」(法律文化社、一九九九年)を参照。
- (3) 拙稿「立教中学校の新学制への移行過程―『教務日誌』を手がかりに―」(『立教学院史研究』第一四号、二〇一七年二月)。  
『立教中学校一〇〇年史』は、一九四八年に新制立教中学校が発足したと叙述しており、他の新制中学校より一年遅れて出発したことがわかる。その理由は、「五年制の旧制立教中学校を二分して新制の中・高とするため」であり、また「学校教育法によって新制高校は

二三年度から始める、とされていたため」であったという（立教中学校一〇〇年史編纂委員会編『立教中学校一〇〇年史』立教中学校、一九九八年、二四五頁）。つまり、一九四七年は旧制立教中学校のまま存続し、翌年から立教学院における新学制を実施して新制立教中学校と立教高等学校に分かれたということである。

こうした認識は同時期から存在しており、中学校内でも共通の理解となっていたようだ（『立教新聞』第一号、一九四八年三月一日付、立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵）。そこには、一九四八年に小学校、中学校、高等学校が三校同時に発足したという歴史的かつ象徴的な意味合いが強く作用したものと考えられる。だがその反面、一九四七年の新学制の実施という制度面への意識が欠如してしまい、新制立教中学校が、制度上一九四七年から発足していた事実を見逃してしまつたように思える。そこから一次史料の不在という問題があることは確かだが、制度と実態の両面から、新制立教中学校の発足過程について再検証していく必要があるだろう。

以上から本稿では沿革史の通説ではなく、筆者の研究成果に基づき、新制立教中学校の発足を一九四七年として論じることとした。なお、その詳細については、拙稿を参照されたい。

- (4) 海老沢有道編『立教学院百年史』（学校法人立教学院、一九七四年）五六八頁。
- (5) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編第二巻』（学校法人立教学院、一九九八年）二〇九頁。
- (6) 前掲『立教学院百年史』三九七―四〇〇、五六九頁。
- (7) 前掲『立教中学校の新学制への移行過程』六九―七一頁。
- (8) 有賀千代吉編『立教小学校十年史』（立教小学校・立教小学校PTA・立教小学校同窓会、一九五七年）。

(9) 「主事日記」には、有賀が小学校に着任した一九四八年三月から五七年三月までの記録が掲載されている。原本は立教小学校編纂室に所蔵されており、「十年史」掲載の「主事日記」は、原本の翻刻ではなく抄録したものである。そのほか「十年史」には、「PTA通信抜書」（一九四八年四月から五七年三月まで）が収録されている。「主事日記」および「PTA通信抜書」については、収録文献（「十年史」）に加え、初出以外にも前掲などを付さずに注記する。

(10) 立教学院八十五年史編纂委員会編『立教学院八十五年史』（学校法人立教学院事務局、一九六〇年）には、「立教学院経営主体記録抄」として、理事會記録の抄録版が収録されている。

(11) 本稿で利用する「教務日誌」は、「昭和二十二年七月起（昭和二十三年四月迄）教務日誌 其四 立教中学校（花房）」と「自昭和二十三年五月 至 同 二十四年十二月 教務日誌 卷五 立教中学校」の二冊である。以下、「教務日誌 四」、「教務日誌 五」と略記する。

(12) 立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学、二〇〇七年）を参照。

(13) 杉浦貞二郎「大正九年を迎へて」（立教校友会々報『立教』第二巻第二号、一九二〇年一月、立教学院史資料センター所蔵）。

(14) 同右。

(15) 前掲『立教大学の歴史』八七―九〇頁。

(16) 立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第四巻』（学校法人立教学院、二〇一三年）四四六―四四七頁。

(17) 同右、四四九―四五〇頁。

(18) 同右、四八五頁。

- (19) 同右、五四三～五四四頁。
- (20) 同右、五一八～五二〇頁。
- (21) 六〇年史編集委員会『六〇年の歩み』（立教女学院小学校、一九九七年）四四頁。
- (22) 立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第五卷』（学校法人立教学院、二〇一四年）一一頁。
- (23) 前掲『六〇年の歩み』四五頁。
- (24) 前掲『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第五卷』一八九頁。
- (25) 前掲『立教大学の歴史』一〇二頁。  
 「資料1 立教学院拡張計画案」〔一九三三（昭和八）年〕（立教学院百二十五年史編集委員会編『立教学院百二十五年史 資料編第一卷』学校法人立教学院、一九九六年）七三〇頁。
- (26) 「資料2 立教学院拡張計画案摘要」〔一九三三（昭和八）年〕（同右）七三二～七三三頁。
- (27) 前掲『立教学院百年史』三九一～三九五頁。  
 以上は、佐々木順三「終戦直後の立教」『季刊「立教」』第七四号、一九七五年三月）四～五頁、同「立教学院の再建と小学校」（前掲『十年史』一～二頁、「インタビュー 佐々木順三先生に聞く」（立教学院史研究）第六号、二〇〇九年三月）六四頁などを参照。
- (28) 「佐々木新総長挨拶」（『立教大学新聞』第三六号、一九四六年七月二二日）。
- (29) 立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）別巻FORTH（学校法人立教学院、二〇一五年）一〇三頁。なお、『フォース』とは、一九四〇年一月号より『スプリット・オブ・ミッションズ』を改名したものである。
- (30) 前掲『立教学院の再建と小学校』三頁。
- (31) 同右。
- (32) 立教学院史資料センター編『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第三卷』（学校法人立教学院、二〇一一年）一一〇頁。
- (33) 前掲『立教学院の再建と小学校』三頁。
- (34) 前掲『立教学院の再建と小学校』三頁。
- (35) 前掲『インタビュー 佐々木順三先生に聞く』六六頁。
- (36) 前掲『立教学院の再建と小学校』三～四頁。
- (37) 『座談会「十年を回顧して」』（前掲『十年史』）二二七頁。
- (38) 『松崎半三郎』（森永製菓株式会社、一九六四年）二五五頁。
- (39) 前掲『座談会「十年を回顧して」』二二七頁。
- (40) 前掲『インタビュー 佐々木順三先生に聞く』六六頁。
- (41) 前掲『終戦直後の立教』六頁、前掲『松崎半三郎』二五五頁などを参照。
- (42) 前掲『立教学院における新制大学への移行』一一七頁（原史料は、『財団法人立教学院第九拾八回理事会記録』一九四六年一月二二日）。
- (43) 同右（原史料は、『大学』部長会〔メモ〕一九四七年二月二〇日）。
- (44) 「資料3 財団法人立教学院理事会記録」（一九四七（昭和二二）年）（前掲『立教学院百二十五年史 資料編第一卷』）七七七～七七八頁。
- (45) 同右。
- (46) 「資料1 『文教地区指定申請に就いて』（一九四七（昭和二二）年）」（同右）七七三～七七六頁。なお同文書の詳細については、前掲

- 「立教学院における新制大学への移行」一一八～一一九頁で紹介されている。
- (48) 同右。
- (49) 同右。
- (50) 前掲「インタビュー 佐々木順三先生に聞く」六六頁。
- (51) 「学制百年史」(文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/b-menu/hakusho/html/others/detail/1317571.htm>)。
- (52) 前掲「立教中学校の新学制への移行過程」六四～六八頁を参照。
- (53) 同右。
- (54) 「資料3」(学制改革に関する部長会の審議)「一九四七～四九(昭和二二～二四)年」(立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編第二巻』学校法人立教学院、一九九八年)四七〇頁。
- (55) 「資料1」(第一回学制改革委員会)「一九四七(昭和二二)年」(同右)四六四頁。「教務日誌 四」一九四七年二月二日条。
- (56) 同右書、四六五～四六六頁。
- (57) 「教務日誌 四」一九四七年八月八日条。
- (58) 同右日誌、一九四七年九月二日条。
- (59) 「資料1 財団法人立教学院第百式回理事會記録」(一九四七(昭和二二)年)一九四七年九月二五日(前掲『立教学院百二十五年史 資料編第二巻』)二一〇頁。
- (60) 同右、二一〇～二一一頁。寄附行為の一部改正の概要については、『立教学院経営主体記録抄』第一〇二回理事会、一九四七年九月二二日(前掲『立教学院八十五年史』)四〇一頁より引用した。
- (61) 「教務日誌 四」一九四七年一〇月二日・二三日条。前掲「立教中学校の新学制への移行過程」七〇頁を参照。
- (62) 「資料2 法人寄附行為変更認可申請」(一九四七(昭和二二)年)および「資料3 (寄附行為変更認可)」(一九四七(昭和二二)年) (前掲『立教学院百二十五年史 資料編第二巻』)二二二頁。
- (63) 前掲『六〇年の歩み』一八二～一八五、一八八～一九三、五一七～五一九頁を参照。
- (64) 立教女学院小学校の沿革史によれば、菅岡吉の教育観は戦後の立教女学院に大きな影響を与えたという。例えば、昔は、いち早くミス・ガールデイナーやミス・シェアーファーなど宣教師を始めとするアメリカ人教師を招聘し、戦時中に閉ざされていた宗教教育や英語教育、音楽教育の向上を積極的に推進した(同右、一八三頁)。
- (65) 「森脇先生聞き取り」(立教学院史資料センター所蔵)。
- (66) 伊藤高清『望ましい親—立教小学校にとって—』(伊藤高清、一九八五年)五四頁。
- (67) 前掲「森脇先生聞き取り」。
- (68) 前掲「立教学院の再建と小学校」四頁。
- (69) 「立教学院理事及び学校側幹部懇談会記録」(立教学院史資料センター所蔵)。なお、幹部懇談会は、毎月第二木曜日の午後定期的に開催することが決定されている。
- (70) 同右。
- (71) 「立教学院経営主体記録抄」第一〇三回理事会、一九四七年一(二)月二七日(前掲『立教学院八十五年史』)四〇一頁。同資料では理事會の開催日を一月二七日と記載しているが、正しくは一月二七日である。なお、前掲「立教中学校の新学制への移行過程」では、四八年一月二七日付として叙述してしまったため、時系列含め決定過程の内容に誤りが生じてしまった。その点は、本論で訂正したい。
- (72) 有賀千代吉「創立より今日まで」(前掲『十年史』)八頁。

- (74) (73) 前掲「森脇先生聞き取り」。
- (74) 前掲「立教学院経営主体記録抄」第一〇三回理事会、一九四七年一月二七日。同理事会では、「新学制に基づき、立教高等学校の創立の件、満場一致にて決定」している。この点についても注(71)と同様に時系列などに誤りがあるため、訂正したい。
- (75) 前掲「立教学院の再建と小学校」四頁。
- (76) 前掲「資料3『学制改革に関する部長会の審議』」一九四七〜四九(昭和二〜二四)年」四七頁。
- (77) 「教務日誌」四一九四八年一月二条。「資料4『立教小学校設置認可申請』」二九四八(昭和二三)年」(前掲「立教学院百二十五年史 資料編第二巻」)二二二〜二二四頁。
- (78) 前掲「創立より今日まで」一〇頁。同書には、「私立学校設置認可申請書」および「認可書」が掲載されている。
- (79) 前掲「森脇先生聞き取り」。
- (80) 「はじめの頃の立教小学校―座談会」(『PTA通信特集』第六巻第三号、一九五四年二月)二二〜二四頁。
- (81) 「歴代校長紹介」および「座談会『僕たち立教小学校1回生』」伊藤高清先生、60年前を1回生と大いに語る」(『立教小学校六十周年誌』立教小学校、二〇〇九年)三五、六九〜七一頁。なお、伊藤は、復員後、「職探しを始め」、「大学の時、お世話になったポール・ラッシュ先生のところ」にお願ひに行ったことを回顧している(「元校長、伊藤高清先生に聞く」同、五二頁)。
- (82) 「教務日誌」四一九四八年一月一六日条。
- (83) 「資料5『立教小学校設置認可』」二九四八(昭和二三)年」(前掲「立教学院百二十五年史 資料編第二巻」)二二四頁。
- (84) 前掲「立教学院の再建と小学校」四頁。
- (85) 同右。
- (86) 前掲「望ましい親」五四頁。
- (87) 同右。
- (88) 同右。
- (89) 横島公司「史料紹介」有賀千代吉資料」(『立教学院史研究』第一〇号、二〇〇三年二月)五三頁。
- (90) 「日本を去る有賀先生に聴く」(季刊『立教』第五一号、一九六八年二月)三〇頁。
- (91) 前掲「森脇先生聞き取り」。
- (92) 元校長の伊藤高清は、「小学校のチャブレンをしていた桜井亨先生が推薦したと聞いています。カナダに三〇年もいて、とても熱心なキリスト教の教徒だとのこと」と語っている(前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五三頁)。
- (93) 桜井亨「人は信仰なくしては生きられない」(『立教小学校同窓会五十周年記念誌』「なかま」立教小学校同窓会、二〇〇三年)一五七〜一五八頁。
- (94) 同右。
- (95) 前掲「立教学院の再建と小学校」四〜五頁。
- (96) 前掲「日本を去る有賀先生に聴く」三〇頁。
- (97) 前掲「創立より今日まで」二三頁。
- (98) 同右、一四頁。
- (99) 前掲「はじめの頃の立教小学校―座談会」一四頁。なお、伊藤高清は、学院が有賀に白羽の矢を立てた理由について、「立教の卒業生で、熱心な(聖公会)信者」だけでなく、「これからはアメリカとも関係があったらいいという学院の考えがあったのかもしれない」と推測している(前掲「座談会『僕たち立教小学校1回生』」七二頁)。

- (100) 前掲『望ましい親』五四頁。  
 (101) 前掲「創立より今日まで」一四頁。  
 (102) 前掲「はじめの頃の立教小学校」座談会」一四頁。  
 (103) 前掲「日本を去る有賀先生に聴く」三〇頁。  
 (104) 前掲「森脇先生聞き取り」。  
 (105) 日本キリスト教歴史大事典編纂委員会編『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八年）六〇一頁。  
 (106) 『立教女学院百年史資料集』（立教女学院、一九七八年）五一三～五一四頁。  
 (107) 前掲『日本キリスト教歴史大事典』六〇一頁。同右、五一四頁。  
 (108) 『立教女学院百年小史』（立教女学院、一九七七年）一二八頁。  
 (109) 前掲「森脇先生聞き取り」。  
 (110) 前掲「創立より今日まで」一五頁。  
 (111) 「教務日誌 四」一九四八年二月一六日条。  
 (112) 前掲「立教学院理事及び学校側幹部懇談会記録」。  
 (113) 前掲「座談会『十年を回顧して』」二三二頁、前掲「はじめの頃の立教小学校」座談会」一四～一五頁を参照。  
 (114) 同右。  
 (115) 前掲「座談会『僕たち立教小学校1回生』」七二頁。  
 (116) 前掲「創立より今日まで」一七頁。  
 (117) 『毎日新聞』一九四八年二月八日付。  
 (118) 前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五四頁。  
 (119) 前掲「創立より今日まで」一七頁。  
 (120) 「主事日記」一九四八年三月六日条。  
 (121) 前掲「創立より今日まで」一七～一八頁。  
 (122) 「主事日記」一九四八年三月七～九、一二日条。なお、入試判定会に

- は中学校の花房主事が出席しており、そのほか学院、大学、小学校の教員も参加したものと考えられる（「教務日誌 四」一九四八年三月六日・七日条）。  
 (123) 同右「主事日記」一九四八年三月一日条。  
 (124) 同右日記、一九四八年三月一五日条。  
 (125) 同右日記、一九四八年三月一七日条。前掲「創立より今日まで」一八頁。  
 (126) 前掲「歴代校長紹介」（『立教小学校六十年誌』）三三二頁。  
 (127) 前掲「座談会『十年を回顧して』」三三三頁。  
 (128) 以上は同右より引用。  
 (129) 「主事日記」一九四八年三月一八・二二・二四日条。  
 (130) 前掲「立教学院の再建と小学校」五頁。  
 (131) 前掲「創立より今日まで」二六頁。  
 (132) 同右、一六～一七頁。  
 (133) 『PTA通信』第一号、一九四八年四月六日（立教小学校資料編纂室所蔵）。  
 (134) 前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五六頁。  
 (135) 「主事日記」一九四八年五月四日条。  
 (136) 前掲「創立より今日まで」一八～一九頁。  
 (137) 同右、一五、一九頁。なお、有賀の事務長兼任については、「主事日記」一九四八年四月二日条を参照した。  
 (138) 「PTA通信抜書」一九四八年四月六日条。  
 (139) 「主事日記」一九四八年四月六日条。  
 (140) 前掲『PTA通信』第一号。  
 (141) 『PTA通信』第二号、一九四八年四月二日（立教小学校資料編纂室所蔵）。



- (142) 「立教学院経営主体記録抄」第一〇四回理事会、一九四八年四月二八日（前掲『立教学院八十五年史』）四〇一頁。
- (143) 「主事日記」一九四八年四月七日条。
- (144) 「PTA通信抜書」一九四八年四月二二日・九月一日・二九日条。同右日記、一九四八年八月二日・一〇月二日条。「教務日誌」五・一九四八年五月四日条・一〇月二日条。
- (145) 「主要人事 新制各校 立教小学校」（立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編第三卷』（学校法人立教学院、一九九九年）二〇七頁。ただし、『昭和30年度 立教小学校要覧』には、一九四八年九月一日に教頭から主事に任命されたとあり（六頁）、さらに同所収の「教職員入退一覽表」には、同年三月一日主事就任とある（一二頁）。
- (146) 前掲『PTA通信』第二号。
- (147) 前掲「創立より今日まで」三三頁。
- (148) 前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五七頁。
- (149) 前掲『PTA通信』第一号。
- (150) 前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五七頁。
- (151) 前掲「創立より今日まで」四七〜四八頁。
- (152) 「主事日記」一九四八年六月五日・八月六日条、および「PTA通信抜書」一九四八年八月一日条より引用。
- (153) 前掲「元校長、伊藤高清先生に聞く」五七頁。
- (154) 前掲「創立より今日まで」四八頁。
- (155) 「主事日記」一九四八年八月七日条。なお、前掲『十年史』で、有賀は「キャンピングと秩父宮様」と題し、御殿場での児童たちと秩父宮夫妻の交流を詳述している（四七〜五一頁）。
- (156) 宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵「旧皇族雑録」、「皇族御動靜」など。
- (157) 「主事日記」一九四八年五月九日・二二日条、十一月二七日条、十二月二五日条。
- (158) 同右日記、一九四八年一月一日・二七日条。
- (159) 同右日記、一九四九年一月八日条。なお、「教務日誌」五には、一九四九年一月一〇日条に「入学判定会」が開かれ、花房主事が出席したとの記録がある。
- (160) 同右「主事日記」一九四九年一月八日・九日条。
- (161) 前掲「立教学院理事及び学校側幹部懇談会記録」。
- (162) 「主事日記」一九四八年四月二二日条。前掲「創立より今日まで」三六頁。
- (163) 同右日記、一九四八年九月二日・二〇日条、一九四九年三月三日・一三日・一四日条。同右、三六〜四〇頁。
- (164) 同右日記、一九四九年四月四日条。
- (165) 前掲「座談会『十年を回顧して』」一三五〜一三六頁。
- (166) 同右、二二六頁。